■寄　稿■

（一社）日本断熱住宅技術協会研修会

関門の建築を訪ねて

お茶の水女子大学名誉教授　　田中　辰明

はじめに

（一社）日本断熱住宅技術協会（平田恒一郎会長）はマリンメッセ福岡で平成26年９月27､28日に開催された「住まいの耐震博覧会」にブースを出展し、会員企業の活動を展示し健全な断熱の普及の為、啓蒙活動を行った。これに先立ち、９月26日に関門に残る歴史的建築物を巡る研修会を催した。会員で理事であるStoジャパン㈱・佐々木隆代表取締役社長、㈱自由建築設計・椎名修氏、ナイス㈱・原田浩之氏ら多数が参加した。筆者は小学校時代門司で過ごした（昭和24～27年）事があるので、研修会参加者を代表して見学調査を行った建物を紹介する。

１）門司港駅（北九州市門司区西海岸1- 5- 31）

門司港駅は昔、門司駅と言った。現在の門司駅は大里という駅であった。駅舎が出来たのは明治24年で大正３年に200m程移動し、現在の場所に建てられた。ネオ・ルネッサンス調の木造建築で、ドイツ人技師ヘルマン・ルムシュッテルの設計であった。青銅製の手水鉢、水洗トイレ（当時としては珍しい）、御影石とタイル貼りの洗面所は重厚で今でもモダンである。当時は本州から蒸気機関車で関門トンネルを抜け、門司に入ったので、乗客の顔は煤でよごれた。これをこのモダンな洗面器で洗ったのである。この駅は駅舎として初めて国の重要文化財に指定された。**写真１**に改修前の門司港駅を示す。**写真２**に改修工事中の門司港駅の屋根を示す。**写真３**にシートを被った工事現場を示す。この改修工事はこれから５年かかるそうである。

２）旧門司鉄道管理局（旧JR九州本社ビル）（北九州市門司区西海岸1- 6- 2）

鉄筋コンクリート６階建てで三井物産門司支店の３代目のビルとして建設された。当時は九州一の高層ビルであった。昭和28年に国鉄に買収され、門司鉄道管理局と呼ばれ「門鉄ビル」の愛称で親しまれた。門司鉄道管理局は九州全体の国鉄を管轄、管理していた。そして平成13年までJR九州北九州本社として使用されていた。現在１階は観光案内所になり、当時の建物内部を公開している。**写真４**に建物外観、**写真５**に建物内部、**写真６**に当時使用されていた装飾性に富んだ椅子を示す。

写真１　門司港駅

写真２　改修中の門司港駅屋根

写真３　門司港駅改修工事現場

写真４　旧門司鉄道管理局ビル外観

写真５　旧門司鉄道管理局ビル１階内部（柱も凝っている）

写真６　旧門司鉄道管理局ビルでは非常に装飾性に富んだ椅子が使用されていた。

３）旧門司三井倶楽部（北九州市門司区港町7-１）

大正10年に三井物産の社交倶楽部として建設された。建物はハーフティンバー様式（木骨造）と呼ばれる欧州伝統の木造建築工法である。木造の骨組みの間を漆喰、煉瓦、石材を使用して木造の骨組みが外部に出てアクセントとなっている。窓枠、階段の親柱には幾何学的なアールデコ調の模様が施され、大正モダンを感じさせる。アルバート・アインシュタインも宿泊し、当時のままベッド、バスタブ、トイレも残されている。門司が港町として栄えた時代の象徴的な建築物である。**写真７**に建物外観、**写真８**にアインシュタインの使用したベッド、**写真９**にアインシュタインが使用したバスタブ、**写真10**にアイン

写真７　三井倶楽部外観

写真８　アインシュタイン博士が使用したベッド（三井倶楽部）

写真９　アインシュタイン博士が使用したバスタブ（三井倶楽部）

写真 10　アインシュタイン博士の署名と暖炉（三井倶楽部）

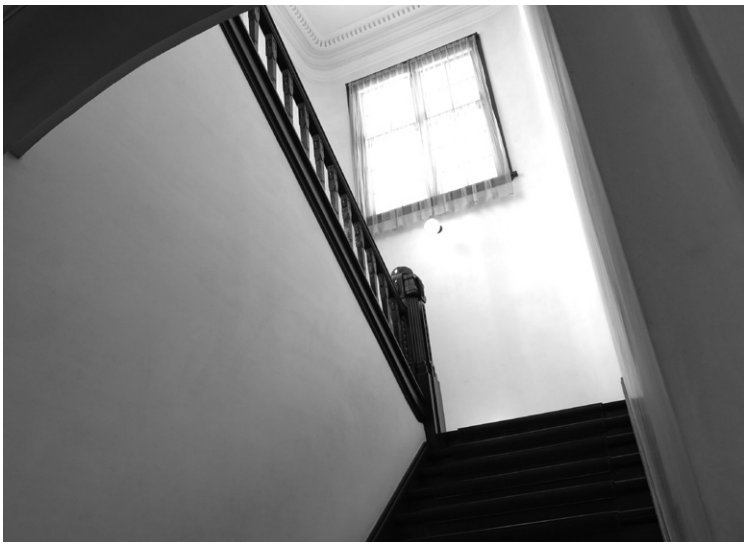

写真 11　三井倶楽部の階段

写真 12　「大正モダンは門司から」のポスター

写真 13　門司出身林芙美子の展示室（三井倶楽部）

シュタインの署名と当時使用されていた暖炉、**写真11**に階段を示す。「大正モダンは門司から・・」と大正から昭和初期の門司の繁栄ぶりを紹介する展示室もある。「東京では今日は帝劇、明日は三越の頃、門司港では今日はマルセイユ、明日はロスでした。」という当時のポスターも展示されていた。事実昭和９年には3000隻の外国船舶が門司港に入港したそうである（**写真12**）。三井倶楽部には「花のいのちは短くて、苦しきことのみ多かり」と述べた門司出身の作家林芙美子の展示室がある（**写真13**）。

４）旧門司税関（北九州市門司区東港町1- 24）

明治42年に門司税関が発足したのを機に明治45年（1912）にレンガ作り瓦葺きの２階建構造で建てられた。昭和初期までは税関庁舎として使用されていたが、平成６年にネオルネサンスと近代的デザインを混合した建物として改修された。展示室、ギャラリーとして使用されている。（**写真14**）

写真 14　旧門司税関ビル外観

５）栄町商店街

かっては門司で一番栄えた商店街であった。常時多くの買い物客で賑わっていた。港祭りではこの商店街を芸者さんを先頭に多くの仮想行列や人が練り歩いた。現在は残念ながらその面影もなくシャッターの下りた店が多い（**写真15**）。中には昔懐かしい平民食堂という大衆食堂があった。しかしこれも店頭に「暫く休店」との看板が掛けてあった（**写真16**）。

写真 15　門司で一番の繁華街であった栄町商店街

写真 17　門司の往時の繁栄を今に伝える料亭「三宜楼」

写真 16　休店中の昔懐かしい「平民食堂」

写真 18　三宜楼の廊下

6）三宜楼（北九州市門司区清滝3- 6- 8）

門司港は水深が深い事から良港であった。そして山も急峻である。清滝地区はこの急峻な丘にある。清滝の丘が始まるところにかっての門司港の繁栄をうかがわせる料亭が多数あった。明治、大正に接待用の料亭が多数建てられた地区である。石堀が続く路地、格子戸のある木造家屋、懐かしい雰囲気の路地裏を歩くことが出来る。「三宜楼」は遅れて建設されたが、往時は門司のトップの料亭であった。また九州最大の料亭であった。その他清滝地区には旧料亭醍醐、料亭大和らが軒を並べている。筆者が門司に住んでいた時には深夜まで芸者さんが奏でる三味線の音が聞かれた。昭和６年に建設され、木造３階建である。金融、海運、貿易さらに鉄道、税関など官庁のトップの社交の場として使用された。門司の出身で、門司に独立系石油会社を創立した出光佐三氏が好んで利用したそうである。本人も芸能を良くこなし、この楼閣で常盤津を謡っていたとの事である。

写真 19　三宜楼の内部

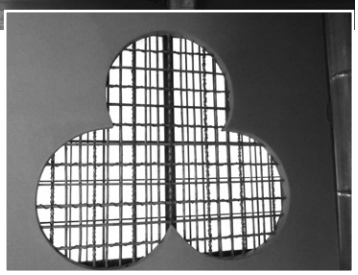

写真 20　三宜楼の明かりとり障子

写真 21　三宜楼大広間

写真17に建物外観、写真18に廊下、写真19、写真20に建物の内部を示す。また大広間を写真21に示す。

門司を代表する祭りは「港祭り」である。昭和６年３月に門司港の修築工事が完成した際、門司みなと祭の計画が商工会議所のなかで持ち上がった。翌７月に大連定期航路が、また９年には天津航路が開設され、門司港は国際港としての地位を確立した。

これを背景として、昭和９年に当時の門司商工会議所会頭（出光佐三氏）の音頭により、第１回門司みなと祭が５月１日から３日間盛大に開かれた。船に関係のある出し物が多く、町内のシャギリ、芸者衆の総出演、在郷軍人の軍旗祭、和布刈神社の玉替え行事等で、祭り気分は町を埋めつくした。芸者衆はこの三宜楼に集合し、町に繰り出した。一時中断されたが、復活し2014年には５月24,25日に開催された。

市街地から清滝の丘をめがけて歩いていたら「かごしま屋」という靴屋さんがあった。今も靴を作り、また修理を行っている。既成靴の販売が中心になった現代に貴重な存在である。この店頭には木製の靴型が多数置いてあった。本誌2014年２月号に「世界文化遺産アルフェルトのファーグス工場」というタイトルでグロピウスが設計した靴型を作る工場が紹介された。まさにその靴型である。現在では珍しいもので、これを見て門司の歴史を感じ取った（写真22）。

写真 22　木製靴型を並べる靴屋さん

写真 23　九州鉄道記念館

写真 24　本来の門司駅はここにあった。（鹿児島本線のスタート点）

写真 25　九州への０哩標識

７）鉄道記念会館（北九州市門司区清滝２丁目3- 29）

旧九州鉄道本社が九州鉄道記念館として生まれ変わったものである（写真23）。懐かしい鉄道車両が展示されている。この建物のすぐ近くに旧門司駅があった（写真24）。ここには九州の鉄道０哩の標石がある。鹿児島本線の起点である（写真25）。

8）バナナたたき売りの発祥地

明治36年頃からバナナが輸入されるようになった。当時日本の領土であった台湾から門司に入り、”生まれは台湾台中で、・・青い時からちぎられて、金波銀波の波越えて・・着いたところは門司みなと・・門司は九州大都会・・さあ買うた買うたこのバナチャン食べたなら末は博士か大臣か・・“といったはやり歌にのせられ、たたき売りが行われた。この道にバナナ商人がずらりと並んだそうである（写真26）。

写真 26　バナナたたき売り発祥の地

9）旧大阪商船ビル（北九州市港町7-18）

大正６年に建設された旧大阪商船門司支店ビルを修復したもので、八角形の塔屋を持つ。オレンジ色の外壁でひときわ目立つ建物である。現在は１階は海峡ロマンホールと呼ばれ、展示が行われている（写真27）。

写真 27　旧大阪商船ビル

10）旧門司電話交換局（現在門司電気通信レトロ館）

大正13年（1924年）に逓信省門司郵便局電話課庁舎として山田守が設計し建設された。ドイツでブルーノ・タウト、グロピウスにより花開いたドイツ表現派の流れをくむモダン建築である。当時多くの電話交換嬢が働いた建物である。最大時は300名以上の女性が働いた華やかな職場でもあった。かつこの職業は若い女性の憧れの的であった（写真28）。

写真 28　旧門司電話交換局

11）和布刈神社

九州最北端の神社と呼ばれている。旧正月にここの神官が松明を持って流れの速い海に入り、わかめを刈り取り、神に奉納し航海の安全、国家の安全を祈念する行事があり、この事から神社の名前が来ている。ここは対岸の下関に最も近く、距離はわずか700mである。ここに関門トンネルの九州側の入り口がある。このトンネルを使えば下関まで徒歩15分で行くことが出来る。トンネルの下関側の出口は源平合戦で平家が敗れた壇ノ浦である。また関門橋もここに架けられている。写真29に海中に建つ和布刈神社の灯篭を示す。

写真 29　九州最北端の神社「和布刈神社」の海中に立つ灯篭

写真 30　赤間神宮

写真 31　耳なし芳一を祀る「芳一堂」

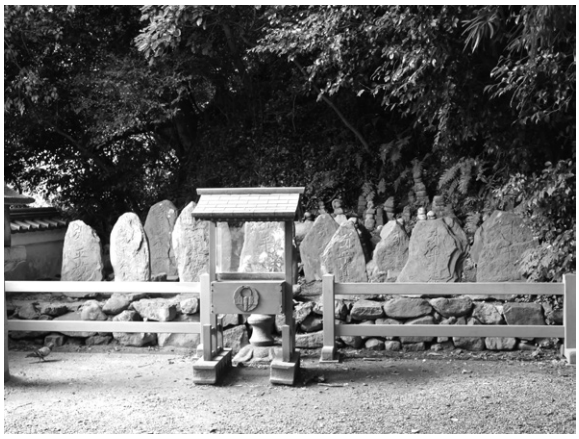

写真 32　壇ノ浦で滅亡した平家一門の墓

写真 33　旧秋田商会ビル

12）赤間神宮

我々は車で海底トンネルを抜けて下関へ出た。出たところが壇ノ浦で、ここに赤間神宮が建つ。この付近一帯の岩は赤みを帯びており、ここで滅びた平家の血に染まったものと言い伝えられている。ここに生息するカニは甲らに人の顔がついている。それも淋しく、うら悲しそうに見える。海に沈んだ平家がカニに乗り移ったと伝えられ、このカニは平家ガニと呼ばれている。赤間神宮は源平合戦で敗れ８歳で関門海峡に入水した安徳天皇を祀って建てられたものである（**写真30**）。壇ノ浦を望む水天門は鮮やかな竜宮造りである。「海の中にも都はある」との二位の尼の願いを映したものと伝えられている。境内には小泉八雲の小説「怪談」で有名な「耳なし芳一」の芳一堂（**写真31**）や平家一門の墓（**写真32**）がある。つい「祇園精舎の鐘の声諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす、おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし、たけき者もついには滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ」という昔暗記した平家物語が口に出てきた。

13）旧秋田商会ビル（現在下関観光情報センター）
（下関市南部町23- 11）

大正４年に建設された西日本最古の鉄筋コンクリート

写真 34　下関南部町郵便局

写真 35　旧英国領事館

造建築である。屋上に日本庭園や茶室がある。内部は和洋折衷の風変わりな建物である。現在は下関の観光情報センターとなっている(**写真33**)。

14) 下関南部町郵便局(下関市南部町22-8)

明治32年に赤間関郵便局が電信局を統合し建設され、この地に移転した。国内で最古の現役郵便局舎屋である。逓信省技師の三橋四郎の設計である。外壁のレンガの壁厚は60㎝と厚く、西欧建築に倣ったものである。下関市に現存する最も古い洋風建築物で中庭は建設当時の雰囲気を残している。結婚式やミニコンサートに使用されている(**写真34**)。

15) 旧下関英国領事館(下関市唐戸4-11)

領事館として使用する目的で明治39年に建設された建物で我が国に現存する最古のものである。明治期の領事館の様子を窺い知ることができる貴重な建造物で平成11年に国の重要文化財に指定された(**写真35**)。

16) 巌流島

車で唐戸桟橋へ出た。ここで、連絡船に乗り換え、いまから401年前に宮本武蔵と佐々木小次郎が決闘を行ったと伝えられる巌流島へ向かった。所要時間は10分であった。巌流島は周囲1.6㎞の小さな平坦な島である。武蔵と小次郎が相対したのは慶長17(1612)年4月13日の事であった。現在は無人島である(**写真36**)。島には武蔵と小次郎の決闘の銅像がある(**写真37**)。また敗れた佐々木小次郎の霊を慰める慰霊碑が建っている(**写真38**)。

写真 36　巌流島と関門海峡

写真 37　宮本武蔵と佐々木小次郎の決闘の像

写真 38　佐々木小次郎の霊を祀る慰霊碑

写真 39　イベントも人気の住まいの耐震博覧会会場

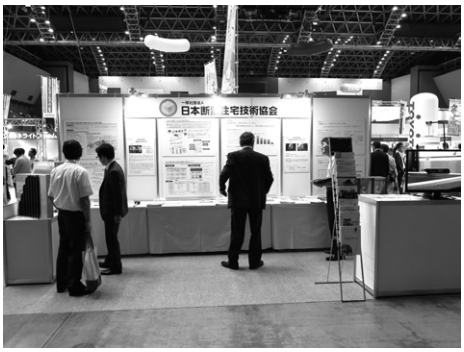

写真 40　来訪者で賑わう（一社）日本断熱住宅技術協会の展示ブース

17）（一社）日本断熱住宅技術協会の展示

マリンメッセ福岡で開催された住まいの耐震博覧会では（一社）日本断熱住宅技術協会もブースを出展し、協会会員会社のパンフレットや模型を並べ、健全な断熱技術の普及の為に啓蒙活動を行った（写真39、40）。お陰様で多くの訪問者を得、和やかな雰囲気の内に交歓が行われた。次回の住まいの耐震博覧会では平成27年３月に東京で行われる。（一社）日本断熱住宅技術協会も再びブースを出展し、協会会員会社のパンフレットや模型を並べ、断熱の普及に啓蒙活動を行う予定である。

おわりに

本稿では北九州市門司区に残る歴史的建築物の紹介を行った。北九州市門司区の人口は2014年８月現在100,745人である。面積は73.42㎢である。近代では石炭の積み出し港、貿易の中継基地としての役割を持つ港湾都市として栄えた。関門海峡を挟んで位置する山口県下関市とは関門連絡船や関門トンネル、連絡橋で接続され、本州から九州への入り口であるため下関との関係が深い。1963（昭和58）年門司、小倉、八幡。若松、戸畑の５市が合併し北九州市が誕生し、三大都市圏以外で初の政令指定都市となった。門司は合併話が出るころから反対運動が強かった。門司は栄えてきた町なのに合併すれば一番外れの区になってしまい衰微するのは明白であるという理論であった。下関も一緒に合併すれば許容できるという話まであった。事実合併前後に門司にあった有力企業（例えば朝日新聞西部本社、毎日新聞西部本社、日銀を始めとする大手銀行（みずほ銀行は例外として支店を残している）、JR九州は店を閉め、多くは小倉へ移転した。現在レトロの町として生き残りを図っているが、かつての栄光を取り戻す事は困難である。筆者が門司に居住していた時は戦後日本の復興に結果的には寄与した朝鮮動乱があり、この恩恵を受けたのが門司であった。

当時は雑誌や書籍には地方定価というものが設けられ、同じ書籍を購入するにも東京より地方は高価であった。それにも拘らず門司の人々の顔は明るかった。

シャッター商店街、過疎に高齢化、地方の衰退が問われて久しい。「地域経済の活性化、地域における雇用の創出、地域の活力の再生を総合的かつ効果的に推進するため地域が行う自主的かつ自立的な取り組みを国が支援する」として石破茂氏が担当大臣となっている。大いに期待したいが果たして良いアイディアが出てくるであろうか？やはり国からの発信なら「道州制を導入する」といった国でなければできない施策を述べるべきで、「提案は地方がやれ、良い案なら予算を付けよう」といった役所の発想では地方都市は甦らないであろう。わが国同様第二次世界大戦の敗戦国ドイツは国の機関を首都に集中させていない。たとえば首都はベルリンであるが、最高裁判所（憲法裁判所）はカールスルーエ、発券銀行（日銀に相当）や株式交換所はフランクフルト、防衛省はボンなどと分散している。日本の発想では効率が悪くなるであろうと考えるが、現在のドイツは欧州全体をけん引する国となっている。かつて反映した門司を訪問し、考えた地方都市再生への思いである。